

巻 頭 言

平成十八年度四月、短期大学部文化創造学科は二百有余名の学生を迎え、新学科としてのスタートを切った。文化創造学科は、人間文化の幅広い文化的所産を体系的かつ総合的に学べる学科である。学生の知的興味や学習意欲を惹き出しながら自らの関心の在り処を明確にさせ、ひとりひとりの実力養成・進路決定を支援していくという旗幟を鮮明に掲げた本学科では、四月以降、学生の指導育成に教職員一同全力を傾注している。第一期生たる新入生達は、さまざまな履修モデルに沿いながら、「知る・体験する・表現する」というカテゴリーに分かれた科目を学び、段階を踏んで着実な歩みを印し始めている。教職員・学生一同、無事に船出をしたことを喜びつつ、文化創造学科の魅力を一層高めるべく、今後とも努力を継続していく所存である。

ここに著された冊子は、文化創造学科の記念すべき紀要第一号である。学習・人間形成の両面における教育活動に熱心に取り組み、学科内外の多忙な業務に日々忙殺されている本学科の教職員が、限られた時間を有効に使いながら研究した成果をここに問うものである。ここに集められた充実した力編を読むと、本学科教職員の力量と自己研鑽ぶりが改めてよくわかる。投稿者および編集者に感謝の念を表したい。ささやかながら、本紀要を一つの拠点として、文化創造学科教員の研究・教育活動が一層盛んになることを関係者一同期している。大方の今後のご支援・ご鞭撻を願ってやまない。

この場を借りてひとつの挿話を記すことをお許しいただく。

宮本武蔵は、かの『五輪書』において兵法を五つの道に分け、それぞれを「地・水・火・風・空」という五巻に書き顕した。その水之巻の「兵法の目付」の中で、「観見二つの事」という問題を論じている。「観見」とは、二つの異なる見方のことなのだが、武蔵は、「見ト云ハ、目許ニテ見ル事也。観ト云ハ、心ニテ観ル観智ノ事也。精神腹ニ治テ強ク成ル気ヲ発シテ見ルモノ也」と説明し、剣道の極意に達するには「観」の力を養う修行が大切だと力説している。この一家言は奥行きのある言葉であり、実に味わい深い。剣道・兵法に限らず、どのような学問においても、この「観」の眼を養うことが必要なのではないだろうか。「観」の眼とは、ものを見たり考えたりする際の自らの視点のことに他ならず、この立脚点を定位させなければ学問的な研究は成立しなくなるだろう。考え方・ものの見方という意味の「観」を修行によって養うこと、即ち、長く深い学問的討究において「観」察眼を磨き、自らの人間「観」、学問「観」、社会「観」、歴史「観」、国家「観」等を確立するところに学問の目的はあり、そこから独自の研究が生み出されるのではないか？ 武蔵の言葉を噛み締めながら、そのようなことを思った次第である。

末尾に記したこの挿話が、学問を志す学生を諭し、研究を続ける教職員の励ましとなるならば、筆者にとってこれに勝る喜びはない。

(井原奉明)